

保育園安全だより

—事故報告より—

令和6年10月～12月



新しい年を迎え、各園では新年の行事など取り組まれている頃ではないでしょうか。今年度も残すところ3か月となりました。今回の保育園安全だよりは、12月16日までに提出された事故報告（320）件をまとめました。

令和6年度 事故報告書集計（10～12月）												
	園内								園外			
	保育室	ホール	廊下	玄関	トイレ	テラス	園庭	その他	道路	公園	その他	計
0歳児	17	1	0	0	0	1	0	1	0	0	1	21
1歳児	51	2	0	0	0	7	12	1	0	4	2	79
2歳児	31	8	0	0	1	0	20	1	2	2	1	66
3歳児	14	11	2	0	2	3	21	2	0	1	1	57
4歳児	16	5	1	0	0	1	11	1	1	2	1	39
5歳児	20	6	0	0	0	2	25	0	1	3	1	58
合計	149	33	3	0	3	14	89	6	4	12	7	320

【集計から】

暑さが峠を過ぎるとともに、園庭での事故が増加しています。幼児クラスでは鬼ごっこが盛りあがった時にバランスを崩して怪我をしたり、探索遊びをしながら木の枝で顔をすり擦過傷となってしまうなどの報告があがっています。また、前回も件数の多かった1歳クラス保育室での事故は、今回も多い傾向にあります。園内の事故情報が共有されずにいると、重大な事態を招くことにつながりかねません。安全な保育をおこなうために、再度全体で確認していきましょう。

【昨年度1月～3月の事故傾向について】

子どもの事故には時期的な傾向も見られます。令和5年度末は、歩けるようになった乳児が、不安定な足取りからの転倒、色々な興味から思いがけない行動での怪我報告がありました。またこの時期は、経験年数の浅い職員が保育を任されることもあり、保育環境の配慮不足や子どもの行動を予測できずに起こった事故も報告されました。他にも子どもの声に耳を傾けたが保育者の受け止めが弱く、目立った傷がないと判断し様子を見てしまい、受診が遅れた事例もありました。昨年度の傾向と対策案を参考にして、安全な保育に繋げていきましょう。

- ① 落ち着いて遊んでいるから大丈夫と思いこまずに、保育士はその場を離れない。
- ② 園庭に多人数が出た場合、誰がどこを見るか職員間で責任の所在を明確にする。
- ③ 引継ぎ時等では、職員間で活動のポイント（立ち位置・注意点等）を伝達する。
- ④ 事故発生後は、複数の職員で子どもの状況や体の痛みなどを聞きとり、全身を確認し、しっかり経過を見る。そしてその内容を保護者に丁寧に伝える。



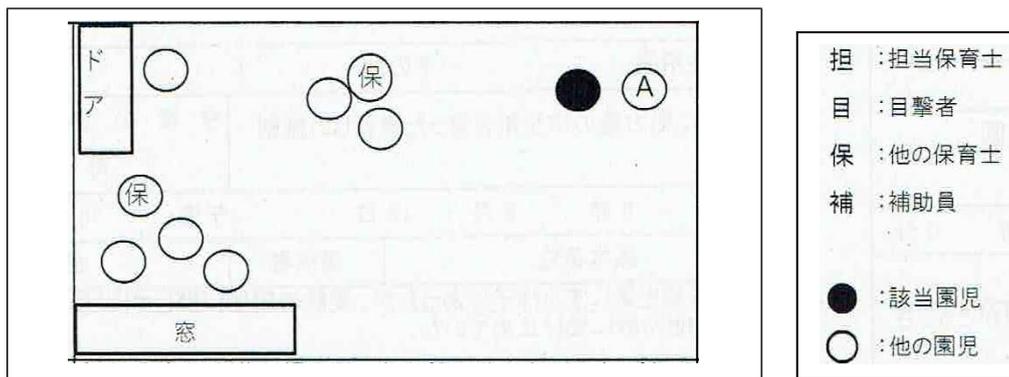
【検証とその後の対応が課題の事例】

【事例1】 1歳児 発生時間 15時45分

《発生状況》

おやつ後の活動の場面で、少人数に分かれてそれぞれの遊びを楽しんでいた。該当児は室内でブロック遊びをしており、組み立てたブロックを保育士に見せながら部屋の中を歩いて回っていた。A児は部屋の奥側で一人じっくりとブロックで遊んでいた。そのA児が遊んでいる場所に該当園児が近づいた瞬間にA児が該当園児の腕に噛みついた。

《現場図》



《原因・問題点》

- ・A児には以前から他児を噛む姿があったが、最近は言葉で伝える姿が増え噛みつく素振りが減っていたところで起きた事故であった。最近は噛みつくことがなかったからと思い油断をして目を離していた点が問題だった。
- ・詳しい現場検証を行う前に受診に行き、噛みつきの詳細を職員が把握できていなかった。そのため受診後保護者に伝える際に、受傷の経緯を明確に伝えられず、保護者に不安感を持たせてしまった。

《その後の改善策》

- ・保育士は子ども全体が見える位置につき、一人ひとりに目を配り遊びや動きを把握する。
- ・子どもの特性や状況を非常勤職員含め全職員が把握できるよう情報共有し、注意深く見守る目を増やし、再発防止につなげる。
- ・受診に向かう前に速やかに受傷の経緯の伝達、現場検証を行い、正確に把握し説明できるようにする。

乳児の噛みつきやひっかきの原因は様々です。今回は、事故が発生した経緯や状況をすぐ共有していなかったことが課題の事例です。事故発生の際は、数名で怪我の状態、発生時の状況（現場で）、それに対する改善策などを検証し、子どもと保護者の思いを受け止め、丁寧に説明することが重要です。

事故発生 → 応急処置・状況確認 → 保護者連絡 → 受診 → 保護者報告 → 全体共有

※ 怪我の状況に応じて 事故検証・解決策検討し保護者に報告



【他園児にむぎ茶を提供してしまった事例】

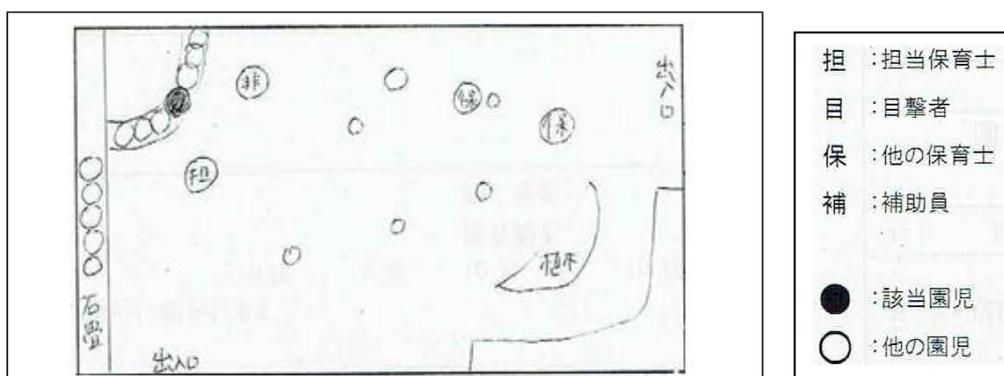
【事例2】 1歳児 発生時間 10時20分

《発生状況》

園児17名、職員4名で園外の広場に散歩に出かける。帰園前に麦茶を飲もうと園児に声をかけ、10数名が木陰の石畳に並んで座る。声をかけた正規職員が見守り、会計年度職員が順に紙コップを渡してお茶を注ぐ。飲み終えた児が立ち上がり始めたので、入り口付近に集まるように声をかけながら順に移動する。その後、あとから来た職員が他園の1歳児の一人が自園児に混ざりお茶を飲んでいることに気づく。

すぐに他園職員に声をかけ、麦茶を飲ませてしまったことをお詫びし、同時に麦茶アレルギーの有無も確認した。

《現場図》



《原因・問題点》

- ・ 広場への散歩で、他園の子もいる中でお茶を飲むなどの行動をとる際、誰が飲んでいるのか把握できていなかった。また、すぐに飲み終わった児と移動してしまい、他園児が飲んでしまった事にすぐに気づくことができなかった。
- ・ 広場では、他園児が自園児にまざり話を聞くなど、一緒に行動する姿も見られていたにも関わらず、その後一緒にお茶を飲むかもしれないと予測できなかった。
- ・ 顔を見て確認しながらお茶を渡していなかった。
- ・ どこに何人いるのかなどお茶を飲むときの人数確認もできていなかった。

《その後の改善策》

- ・ 園外などでは特にこまめな人数確認を行うとともに、誰がどこにいるのか、分かれている場合はそれぞれ誰がいるのか確認することを徹底する。
- ・ 遊んでいた児を呼んでお茶を順に飲むなど、流動的な動きをするときには、特に誰が飲んでいるのかなど目視で必ず確認する。
- ・ 職員間で、その時の様子や動きを把握できている人が、こまめに声を出し確認をしていく。

今年度は気温の高い日が続き、園外散歩では水分補給が必須の日々でした。散歩先には、数園の子ども達が遊んでいることもあり交わることも想定されます。そのような中、他園児に麦茶を飲ませてしまった事例です。アレルギー児であれば命に関わる案件でした。活動の流れと職員体制を考慮して、職員の役割分担と、お茶対応をする職員は園児の顔を把握している職員が行うなど、時間に余裕を持った活動を意識していきましょう。

【トゲが刺さった時の処置】

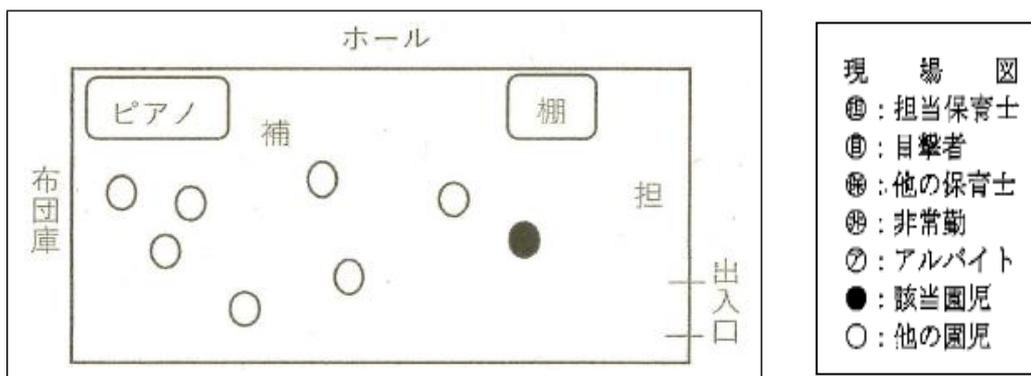
【事例3】

[診断名] 棘刺創

[発生日時] 令和6年7月29日(月) 午後4時30分頃

[クラス・性別] 2歳児クラス (女児)

[現場 図]



[事故発生状況]

ホールでダンスやかけっこごっこ、ボール遊び等を、怪我防止の为上履きと靴下を脱いで行っていた。ボールで遊んでいる際に、該当園児から「いたい。」と申告があり、左足に棘のようなものがささっていることを確認した。全てを取り除くことが出来ず、同日お迎えの際に父に状況と現状を伝えた。自然に取れることもあるが、痛がったり化膿したりする場合は翌日園で受診する旨を伝えた。翌日、「棘が取れず、昨晚痛がる様子だったので受診したい。」と母から話があり、受診に至る。

[応急救護処置の内容]

- ・ 目視できる部分はピンセットで取る。
- ・ 絆創膏で覆う



[事故原因・問題点]

ホールの壁に一部ささくれている箇所があり、そこで足をこすったことが考えられる。

[その後の改善策]

上履きを脱いで活動する際は特に、床やささくれないか確認する。

[園長意見]

ホールでは裸足で遊ぶことがよくある。日々の掃除等の中で十分気をつけてはいるが、床や壁の状況などいつもと違うことなどがあればすぐに声を出し修繕を行い、安全に十分に配慮していくことを確認した。

～看護師のコメント～

この事例はトゲが刺さり、取った後も痛みが続き、翌日受診した例です。

異物が残っていると、傷口から感染し化膿することがあります。また、そのまま放置すると周囲の皮膚が固くなり、ますます取れにくくなってしまいます。トゲを完全に取りきれなかった場合や、痛みが続いたり、気にしたりする様子があるときは、当日皮膚科か形成外科を受診することが必要です。

トゲが取りきれているかわからない場合は、絆創膏を貼るのは控えましょう。絆創膏を貼ることで化膿してしまうことや、トゲが奥に入ってしまう取れなくなることがあります。

トゲを抜く時には、医療用の※トゲ抜きピンセットを常備しておくとう便利です。参考にしてください。



※トゲ抜きピンセット



【鎖骨骨折で診断までに時間がかかったケース】

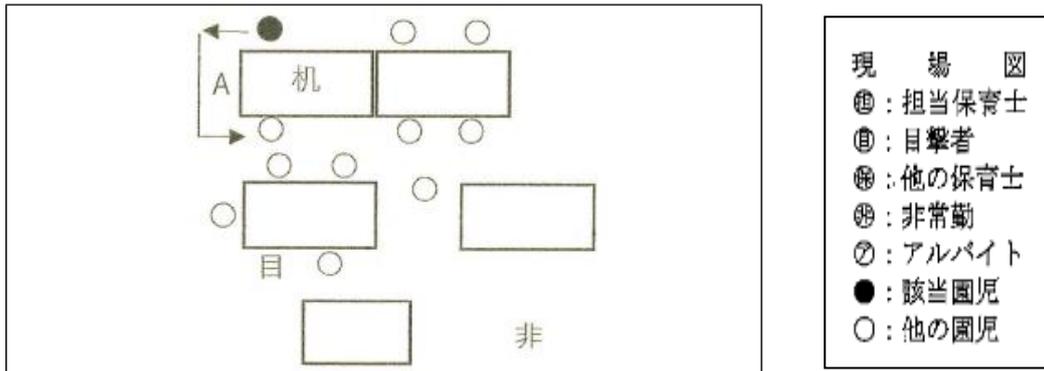
【事例4】

[診断名] 右鎖骨骨折

[発生日時] 令和6年8月13日(火) 午後12時18分頃

[クラス・性別] 4歳児クラス (男児)

[現場図]



[事故発生状況]

該当園児を含む4歳児3名が机を囲みボードゲームをして遊んでいた。途中でゲームのパーツが床におち、それを拾おうと該当園児を含めた3人が立ち上がる。自分の向かい側の床に落ちていたためテーブルを回り込みながら拾いに行こうとした際、一緒に立ち上がっていたA児の椅子の足に該当園児の足が引っ掛かり、肩から転倒する。(背もたれのない後ろの足が少し斜めに出ているタイプの椅子)

1週間経ってもまだ肩に違和感や時々痛みがあると児からの訴えがあるため、園欠席の日に保護者(父)が引率して受診し、受傷がわかった。

[応急救護処置の内容]

- ・右肩周りを痛がっていたので冷やす。
- ・他に痛む場所や怪我している場所はないか、腕は動くか上がるかを確認する。

[事故原因・問題点]

- ・周囲に椅子しかなく、足元が散らかっていたわけではなかったが避けることが出来ず、また、回り込みながら足がひっかかったことでバランスが崩れ、そのまま肩から転んだ際に手が出なかった。
- ・該当園児は体幹も弱く、もたれかかったり何も無いところで転んだり、足元や近くの障害物に気が付くことが出来ず躓くことが多い。以前も今回のように椅子の足に引っ掛かり転倒することがあった。普段から身体のバランスの不安定さがあり、咄嗟に手が出にくい姿がみられる

[その後の改善策]

- ・椅子の足に引っ掛かり転倒する危険性があるということを子どもたちにも知らせ、椅子から立ち上がる時には、椅子を机の中にしまうようにしていくことをクラス全体で確認する。
- ・身体の使い方、体幹を育む遊びを取り入れていく。

今回は事故発生から受診まで日にちが経ってしまった。状況や子どもの様子を保護者と共に確認しながら経過をみていた。この時期病院が休みで翌週まで様子を見ていく形となったが、受傷後少しでも違和感があるようなら、早めに受診をしていくことも必要だった。保育室の環境や椅子の扱い方など職員が常に意識し環境整備を行うとともに、子どもにも怪我につながることを意識させるように伝えていく。また体幹や身体の使い方を育む活動を保育の中にとりいれ、体づくりを行っていく。完治までの動きの制限もあり十分に配慮しながら丁寧な対応をしていくことを周知した。

～看護師のコメント～

この事例では、事故発生から受診まで日にちが経ってしまった例です。また、他にも鎖骨骨折の事例がありました。



[別の鎖骨骨折の事例]

該当園児（1歳児クラス）

左腕に体重がかかるように転倒。その際、近くにいた別の園児が該当園児の右腕に乗りかかるように転倒。該当園児は10分ほど泣き止まず、保育士は脱臼の可能性があると考え、腕・肩の可動域を確認し、整形外科を受診したが診断がつかず、2日後別の病院で鎖骨骨折が分かった。

鎖骨骨折は転倒などにより肩や腕に衝撃を受けて折れる場合が多く、子どもに多いのが特徴です。今回のように受傷部位が、肩と腕の場合は、鎖骨骨折の可能性もあることを念頭に置いて、経過を観察しましょう。

子どもは、どこが痛いかを具体的に正確に伝えることが難しいです。痛がり泣き止まない、痛みが続く、動かさない、動きがおかしいなどがある場合、受診して医師の判断を仰ぎましょう。また、痛みの場所を確認するために、無理に動かすことはやめましょう。

参考

鎖骨骨折の症状には次のようなものがあります。

- ・患部の腕を上げる動作が困難で、痛がって嫌がる
- ・脇の下から手を入れて抱き上げると痛む など

